

縄文時代 集落の周りはゴミ捨て場？

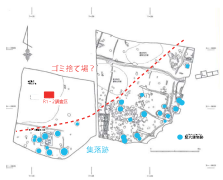


縄文土器や石器がままとまって捨てられた様子。



①山田上ノ台遺跡(仙台市)
名取川左岸の丘の上にある、縄文時代中期末(約4,000年前)頃の集落跡です。これまでに38棟の竪穴建物跡がみつっています。

集落跡の北西側を調査したところ、壊れた土器や石器のままとまり、焼けた土の広がりなどがみつかりました。
当時の人々は竪穴建物跡が集まる住まいの場から離れた場所に、様々な物を捨てていた様子が分かります。



貝塚に積み重なる縄文のくらしと祈り



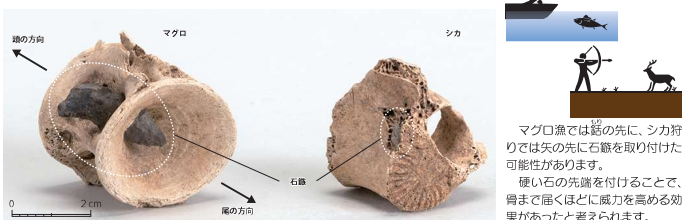
②大久保貝塚(南三陸町)

【復興調査】河川堤防復旧事業
志津川湾に注ぐ水尻川(約2,900~2,500年前)の貝塚です。
貝塚全体を調査したところ、土器や石器、骨角器などの生活道具、当時食べられた様々な貝類や魚骨、獣骨などのほか、土面や土偶、石棒などのまつりの道具がみつかりました。
縄文時代の豊かなくらしと、人々の祈りやまつりの様子を知るための貴重な手がかりとなりました。

骨が語る 狩りや漁の道具の威力

③大久保貝塚(南三陸町)

【復興調査】河川堤防復旧事業
左はマグロの背骨に石鏃が突き刺さったもので、当時の海上における魚の様子を示す遺物です。マグロの頭の方から背骨に刺さったとみられます。
右はシカの背骨に石鏃が突き刺さり、骨と石鏃の両方が併せています。いずれも狩りや漁の力強さを物語る遺物です。



発掘が終わっても、発見は続く

④大久保貝塚(南三陸町)

【復興調査】河川堤防復旧事業
貝層の中には、貝殻や魚骨、壊れた道具など、形や大きさの異なる様々な遺物が数多く含まれています。
調査ではすべての土を持ち帰り、篩にかけて遺物を採集しました。これらは分類・計量されたのち、もとの形に戻す作業や詳しい分析が行われます。
こうした発掘後の作業は、小さな釣り針やアクセサリーを見つけたり、土器の数や形、食べられていた貝や動物の種類などを調べて、当時の暮らしを解明する大切なプロセスです。



飛鳥時代 役人たちの過密な居住域

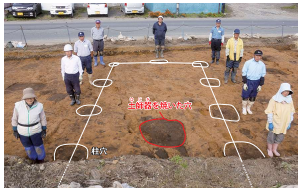
⑤長町駅東遺跡(仙台市)

飛鳥~奈良時代(7世紀中頃~8世紀初め頃)の多賀城創建以前の陸奥国府であった郡山官衙遺跡の西側に隣接する遺跡です。
遺跡は大溝や柵で囲まれており、これまでに500棟以上の竪穴建物跡がみつっています。
今年度の調査でも50棟以上の竪穴建物跡が発見されました。官衙(役所)の周りは一般の集落と異なり、役所に関わる人々が狭い範囲に集住していた様子がわかります。



用語解説 ◆石鏃: 石でつくられた矢じりです。 ◆貝塚: 貝殻や壊れた道具などをまとめて捨てて捨てた捨て場です。
◆国府: 飛鳥~平安時代、中央政府が全国に設置した国の役所です。政府の任命した役人(国司)が派遣されて政治を行いました。

奈良・平安時代 市街地に埋まる古代の集落



⑥源光遺跡(栗原市)

築館の市街地が広がる段丘に立地する奈良~平安時代(8世紀前半頃~9世紀前半頃)の集落跡です。
竪穴建物跡15棟のほか、大型のものを含む竪穴柱建物跡が3棟、土師器を焼成した穴などがみつっています。
竪穴柱建物は官衙関連遺跡で多くみつかると見られます。主に竪穴建物で構成される一般集落とは特徴の違う集落が市街地に埋もれていました。

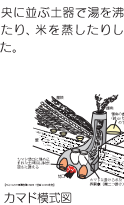


調査地には竪穴建物跡が集中しており、集落の中心部分だったと考えられます。



方形にめぐる溝は、古墳時代の墓の施設である可能性があります。

よくわかる!古代のカマドの構造



⑧彦右門橋築跡(大衡村)

竪穴建物跡では、残存状況の良いカマドが発見されました。
カマドは、焚口の両側に逆さまにして据えられた網の長い土師器の窯(長胴窯)を骨格として構築されています。中央部には煮炊きに用いた甕がほぼそのまま横並びの状態で見られ、煙突の基礎とした甕もみつかりました。本来は煮炊きを使う土器をカマドの部材に転用した興味深い事例です。



まぼろしの「篤借駅」発見か?



一辺約1mの四角い大きな柱穴がみつかりました。倉庫とみられる竪穴柱建物跡です。
北からみた遺跡、奥を見渡せる丘の上にあります。

⑩馬場台遺跡(白石市)

JR 蔵河駅の南西にある、南北に長い丘陵に立地する奈良・平安時代の遺跡です。
調査では、奈良時代前半の竪穴柱建物跡4棟、竪穴建物跡5棟がみつかりました。「馬」の字を含む地名と、方向や柱の筋をそろえた計画的な建物の配置から、駅家(中央地方の連絡のために置かれた施設)のひとつ、「篤借駅」ではないかと考えられています。



発見!古代の陶芸工房



⑦彦右門橋築跡(大衡村)

奈良・平安時代(8世紀後半~9世紀前半)に土器や瓦を生産した窯跡です。
調査では、作業場や住居として使われた竪穴柱建物跡が8軒みつかりました。作業場として使われた竪穴柱建物跡の床面では、ロクロを回転させる輪木を据える穴(ロクロビット)がみつかりました。この竪穴柱建物跡では、ロクロを使って土器づくりをしていたことが分かりました。



ロクロビットのイメージ図



ロクロビットの断面

阿武隈川をのぞむ古代の駅



長辺7.9m、短辺5.3mの規模をもつ竪穴柱建物跡

⑨原遺跡(岩沼市)

阿武隈川左岸の自然堤防上に立地する、奈良・平安時代の玉前駅家とされる遺跡です。駅家は地方と中央との連絡にあたる使者に馬や食料を提供する施設です。
調査では、駅家の構成施設とみられる大型の竪穴柱建物跡がみつかりました。現在も常盤線と阿武隈川が交差するこの場所は、古代にも交通の要所であったと考えられます。



原遺跡から阿武隈川を挟んで南側の丘陵上には、平安時代の官理部の役所だった二十三間堂官衙遺跡が立地しています。

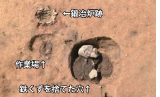
古代の最先端技術!鉄づくりの丘



遺跡は現在の海岸から約1.7km離れています。近くで須恵器を焼いた窯跡もみつっています。
製鉄炉は長方形で、長さ5m、炉に空気を送るための高み箱が付属します。

⑪戸花山遺跡(山元町)

【復興調査】町道建設事業
海を望む南北に細長い丘の上にある、奈良~平安時代の鉄や須恵器の生産にかかわる遺跡です。
今回の調査では、海岸から採れる砂鉄から鉄をつくらした炉跡と、鉄を加工する鍛冶炉跡、これらから出た鉄くずが大量にみつかりました。
働いた人々の住居と工房を兼ねた竪穴柱建物も近くみつかり、一連の鉄生産施設の様子が見えてきました。



◆土師器・須恵器: 土師器は浅く掘りくぼめた土の中で比較的低温(700~800度)で焼かれた素焼きの土器で、赤褐色をしており、東北地方では内面を黒色処理しているのが特徴です。須恵器も素焼きの土器ですが、密閉度の高い窯により高温(1000度以上)で焼かれ、器面は硬く青灰色をしています。